

# 「ひびく」と「わがこと」へ！人権ふおーらむ

御荘文化センターで町内外から約400名が参加して「愛南町人権ふおーらむ」が開催されました。当日は、コーディネーターに森口健司さんを迎え、パネリストとして、東京都八王子市立山田小学校教諭の坂本千代さん、愛媛県久万高原町立久万小学校教諭の大野由利さん、本町城辺小学校教諭の増田元徳さんが問題提起を行いました。また全体討議では、参加者から次々と差別に対する素直な思いや自らの体験が語られました。今号では、3名のパネリストの方の発表を掲載します。



増田元徳さん

## 未来塾の子どもたちが 行っている3つの活動

未来塾の子どもたちがやっている活動を紹介します。1つは、「地元を探る」という取り組み。2つ目は塾生が「人権委員朝放送で流す取り組み。3つ目は、人間関係をよくするために「あつたか言葉」を使うことを全校に提案して、頑張っている友達をカードに書いて、お昼の放送で紹介するという取り組みです。

1つ目の「自分たちの住んでいる地元を探る」という活動は、自分達の地域を知ることです。地域を知ることとは、そこに生きる人々を知ることです。「行事」や「文化」を通して、そこに生き

てきた人達、生きている人達の思いや願い、しんときや喜びなどです。地域を知ることとは、自分の祖父母や親の生い立ちや生き様を知ることです。そして、自分を知ること、自分自身を客観的に冷静にしっかりと見つめる、あるいは見つめ直すということになります。そのためにこういう活動をやっていきます。

2つ目の人権ソングを作って毎朝流すことや、3つ目の「あつたか言葉」をカードに書いてお昼の放送で紹介したり、未来塾の子ども達がこういう運動の原動力の中心になっていきます。

## 出会いとつながり 大事にすることの意味

人とのつながりや出会いを大事にする

る。どんなに強がっていても、人は人と関わらずには生きていけない。人と出会いやつながりを大事にすることができるようになる。

逃げないで挑みかかっている子どもを育てていくためには、部落も部落外も関係ない、全ての子ども達がつながっていかなければいけない。つながりがあるために、積極的に「つながり」を絶えず伝え、裏切られたとか、伝わらなかつたりすることもある。それでも負けたくない、「つながる

んや」「つながるんや」と解放未来塾で指導者は子ども達に言ってきています。

積極的に「つながる」「分かち合う」という気持ちで、友だちの歌を下に書いて、お昼の放送で紹介することにつながっているのです。

ただ、人の良いところをほめあつて良い気分になるとか、見せかけのあいさつを交わして爽やかな気持ちになるとか、そういうことではなくて、つながり合わないといけないんだ、つながるんや、という子ども達の必死の呼びかけなんです。





大野由利さん

家族の死から

一変した我が家

兄を水の事故で、弟を交通事故で亡くしてから、我が家は一変しました。わが子を二人も亡くし、私以上に助けを求めていたのは両親だったかもしれないませんが、子どもだった私には、目の前にある生活や現実がすべてで、親の気持ちを押し量ることはできませんでした。「生きている私を見て...」心の中でいつもそう叫んでいます。

車にはねられた血だらけの弟を救急車に積んだのは、当時12歳の私でした。その日、なぜ子どもがそんなしなければならなかったのか、そして、そのあとの生活がどうなっているのか... 思い出すのも勇気がいることです。毎日が苦しくて仕方ありませんでした。

兄が死んでから、やり場のない気持ちをまぎらわせるため、父はお酒に逃



げるようになりまし。飲んでいないときの父は優しく働き者でしたが、いったん酒が入ると仕事も生活もきちんとできず、兄が死んだときのことを夜通し後悔し始めるのです。その姿を見るのがいやで、父に酒を飲ませかけを与えないよう、私はいい子でいることを覚えまし。

お金のことを実感したのは小学校6年生の夏でした。私は剣道を習っており、全国大会出場が当たり前の県内でも強豪と言われる学校でした。全国大会の出場権を得たとき、私はレギュラーではなく補欠。日本武道館へ行くには自費です。両親のもめごとの原因が私の東京行きだと悟ったとき、私は病気になるという決断をしまし。母には行きたくないと言ひ、友だちには体調不良で行けないことにしてもらいまし。みんなの話題が東京のことになるとつらくはありまし。家の中が平穩であることの方が私には大切だったのです。いつか必ず大会補助の

ある「選手」として全国大会へ行くこと、それが私の剣道を続ける上での目標にもなりまし。

幸せなふりをして生きた子どもの頃

私は子どものころ、自分の苦しさを周囲の人に話すことは絶対にありませんでし。周りの人はみな幸せそうに見えて、自分も幸せなふりをしなければならぬと思ひていまし。そうすることがはじめに思える日もありまし。だが、自分のことをよく知る人たちだからこそ言えなかつたのです。自分にうそをつくことの苦しさは、十分わかっている方もたくさんおられると思ひますが、当時の私も自分で選ぶことができない、変えることができない状況に苦しみ、幸せなふりをしながら生きていまし。

私と同じように自分を隠しながら、今を懸命に生きている子ども達が本当に多くいるのです。今、隣にすわっている人、クラス友、近所に住んで

いる人も、本当は苦しい思いをしてるかもしれない。自分が知っているのはほんの一部で、その人がどんな気持ちでどう生きてきたかを完全に理解することは難しいからです。

だからこそ、「うん、うん、その気持ちわかるよ」なんてことは安易には言えませぬが、その気持ちを理解し、寄り添う気持ちは持ちたいと思ひます。人の間で生きていく人間だからこそ、人とのつながりを大事にしたいと考えていまし。

「私は大野由利以外の何者にもなれない」ということに気付くのにずいぶん時間がかかりまし。そしてそれを受け入れて生きるこの意味を、千代ちゃんから... 同和教育から... そこで出会ったたくさんの方々や子どもたちから教えられまし。そのうえでどう生きるか... それが私自身の価値だと思ひていまし。



坂本千代さん

念願の教員に、

しかし...

小学校2年生の時に我が家に遊びに  
来た同級生が、「本当は千代さんここ  
には遊びに行ったらいけないって、ばあ  
ちゃんに言われたんで」と言ったので  
「2人はこんなに仲良しなのに何  
で？」と、私は思いました。友だちも  
「何でかわからんけど言われたんよ」と  
いう感じでした。それを聞いていた  
母は、うちが同和地区だからだとい  
う理由を察しました。

この出来事を学校に相談したとこ  
ろ、全員の先生方がまとまって同和教  
育に取り組むような学校だったので、  
先生方のお力によって友達と私はもっ  
と仲よくなり、その後もお互いの家を  
頻繁に行き来しました。もちろん、お  
ばあさんにもずっとよくしていただき  
ました。

当時は「頑張った分だけ未来は明る  
い」と思えるような社会だったし、同  
和地区出身だからこそ頑張るぞとい  
うような気負いもありました。中学生を  
対象とした学習会は、中学校の先生方  
が進めてくださいました。そんな恵ま  
れた環境の中で、私もあの先生たちみ

たいな教員になりたいという思いをふ  
くらませていったのでした。  
念願かなって私は、1990年から  
愛媛県の小学校の教員になりました。

愛媛での7年間の教員生活はとても充  
実していました。失敗はいっぱいま  
した。由利ちゃんにはその都度、うま  
くないかない悩みを聞いてもらいま  
した。多くの失敗を通して、先輩の先生  
方や子ども達からたくさんのお話を学  
びました。少しは自信もつき、私は同  
和教育と平和教育にこだわって、これ  
からの教員生活を送っていきたくと思  
うようになっていました。

しかし、1997年（平成9年）3  
月で私は愛媛の教員を退職しました。  
その前の年に10年ほど東京で働いて  
いた父が愛媛に戻ってきて、私の周辺  
をうろつろすることになり果てていた  
のでした。「父から逃げる」ことが目  
的で、私は愛媛の教員をやめ、東京へ  
行きました。

再会の場となった  
全同教での新たな出会い

東京の学校は愛媛と違うことが多  
く、戸惑うことがかりでした。革新的  
な空気は感じましたが、同和教育の実  
践は全くありませんでした。無いばか

りか、同和教育という名前を聞いただ  
けで、その場の空気が冷たくなるよう  
な状況がありました。

由利ちゃんとは全国人権・同和教育  
研究大会を再会の場所としてしまし  
た。熊本大会で一緒に行った分科会の  
会場で、森口先生が発言されていまし  
た。由利ちゃんは、「あの森口先生と  
出会って欲しいんよ」と熱く私に語  
り、翌年の全同教奈良大会で、その言  
葉が実現したのでした。

森口先生は、私のこれまでの話を  
じっくり聞いてくださった後、「ぜひ  
授業を見においでや」と温かく言っ  
てくださいました。それが2か月後に実  
現し、私は徳島まで森口先生の授業を  
観に行きました。

全体学習で語る先生方も生徒たち  
も、みんな本気でした。「これまでの  
学習の積み重ねがあるから、あそこま  
で相手を信頼して本音をぶつけ合える  
んだなあ、すごいなあ」と、たまたま  
されるだけでした。私にはあんなこと  
は無理だとも思いました。しかし、授  
業のあとに森口先生は「雨の日には雨  
の日の過ごし方があるように、東京に  
は東京での実践の仕方があると思うか  
ら焦らなくていいよ」といっ

うなことを話してくださいました。

出会いとつながりへの感謝

人権・同和教育の学びの中で、これ  
まで私が出会った方たちは、お忙しい  
中でもとてもイキイキしておられま  
した。東京に行つて最初はうつむいて  
いた私が、そんな元気で熱い方たちと  
つながる中で、少しずつ前向きな自分  
を取り戻すことができるようになってき  
ました。「素敵な出会い」や「温かく  
て固いつながり」があったおかげで  
す。感謝の気持ちでいっぱいです。  
ここ愛南町にも、イキイキと同和教育  
に取り組む方がたくさんおられます。  
ここにはブレない実践があります。全  
同教大会で愛南町の方とお会いする度  
に、温かい言葉もかけていただきまし  
た。今日は、愛南町の熱心な皆さんに  
これまでの感謝の気持ちを表したい  
と、学校を休んで東京からやってま  
した。  
こんなに熱心に私の話を聞いていた  
だき、来てよかったなあと思っていま  
す。自分のことを話すのは勇気がいる  
ことでしたが、勇気を出して話すこと  
を通して、逆に私を力を与えてくださ  
りました。ありがとうございます

